

安岡章太郎隨筆集
8



安岡齋太郎隨

江

学院图书馆
书章

安岡章太郎隨筆集 8

第六回配本(全八卷)

一九九一年一月五日 第一刷発行 ©

定価四三〇〇円

(本体四一七五円)

著 者 安 岡 章 太 郎
やす おか しよう たろう

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
番地
発 行 所 鐵 岩 波 書 店

電話 〇三三六五二二(案内)

印刷・精興社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-091668-8

目次

I

ゴヤと応挙	3
博物館と新開地と	15
画家と小説家の自我 小出檐重	29
肉体的な刺戟の滑稽感——「切腹」	41
魔力の消え失せた影像——「イワン雷帝」	53
映画館は不良の巣・興奮の場	66
パリ祭	71
音楽の愉しみ	73
悔恨と音楽	77
ステレオの慰め	82

おたまじゃくし散歩 85

II

北国の旦那 103

亮という人 110

麓さんのこと 117

なまけの恥 122

語学の習練 136

春さきということ 142

消えたオノト・ザ・ペン 144

痛みの記憶 151

私の進化論——猿が人間になるまでの孤独の役割 157

京都のゴリラ三代記 172

III

松茸とトリュッフ 187

ピフテキからおろし粥まで 209

くまびき譚	211
父の酒	214
無類の適応力まざまざと	227
本と時代とわたくしと	237
『放屁抄』蛇足	255
犬の教訓	263
コンタと命名	276
犬の戸叩き	290
コンタの上に雪ふりつもる	292
犬と遊べば	298
投込み寺の詩碑——浅草・吉原	306
山門暮色——赤羽・荒川	313
夢の白帆——大森	321
河原から峡谷の小径を辿って——多摩川河畔	329
後記	337

I

ゴヤと応挙

上野にゴヤ展を見に行つて、私は何か黒田清輝の生きている時代にでも戻つたような心持がした。おそらくこれは上野という場所にそんな雰囲気が残っているせいであつて、べつにゴヤとは関係がない。しかし、この何処か大時代なノンビリした気分は、スペインという国柄をいくらか反映しているのかも知れない。

とにかくゴヤ、とくに「裸のマハ」、「着衣のマハ」などは、ほとんど国外に持ち出されたことのない秘宝であり、それがアジアの東の果ての島国のわがくに送られて一般に展示されたわけだから、単なる美術品の貸し出しという以上の熱気や意気込みのようなものが会場に漂つたのは、当然だといえ言える。ただ、それにしても「裸のマハ」のそばに三角帽子をかぶつたスペイン兵が護衛に立っていたのには、やはり驚いた。

勿論、衛兵を立てたのは演出効果のためでもあるだろう。しかし、それだけではあるまい。十年ほど前に私がスペインに行つたときは、たしか武装した軍人にカメラを向けることは軍機保護の理由か何かで禁じられていたように思う。絵の傍に立っていた兵隊も、伊達に金モールなど飾つた服装ではなく、まるで演習に出掛けるようなカーキ色の軍服に身をかため、

黒い眼をケイケイと光らせていた。そして、この兵隊にまもられた絵をみると、この裸の絵のモデルになったのはじつは何とかいう公爵夫人であるといった伝説が、いかにもそれらしいものにおもわれてくるのである。

プラド美術館では、無論「裸のマハ」の傍に兵隊など立っていなかった。美術館の入場料は十円かそこで、マドリッドにいる間私は他にすることもなかったから毎日のように出掛けて行ったが、館内はいつも人けがなかった。ただ、そういうガランとした建物自体が何となく軍人（というより騎士、或いはサムライ）にまもられた城廓を想わせた。そんな中で、「裸のマハ」はいかにも裸の女であり、気位の高さと放埒なものを同時に漂わせていた。

「裸のマハ」が裸になった女を感じさせるのは、傍に「着衣のマハ」が並べられているせいでもある。その効果はあくどいくらいハッキリしている。しかし不思議に、それは決してアクリドイ印象では迫ってこなかった。逆に、何かういういしいようなものが画面の底から伝わってくる気がした。私は、絵の鑑賞について熱心ではなく、ひとから余程誘われでもないかぎり、ふだんは美術館へ絵をみに行ったりもしない。プラド美術館へ出掛けたのは、たまたまスペインに一人で旅行したものの、マドリッドのホテルで毎日、暇な時間をもてあましていたからだ。——ご承知のようにスペインには昼寝の習慣が残っており、それはじつに厳格にまもられていて、午後二時になるとあらゆる建物が扉を閉めて白昼の街全体が深夜の如

く睡ってしまう。勿論、美術館も例外ではなく、二時で閉館して翌朝まで入場は出来ない。そうなる私は、かえって勤勉になり、毎日見残した絵をみてしまわないと落ち着かぬ気がして、せっせと美術館がよいをすることになったのだ——。とはいふものの、何か魅力がなければ同じ美術館にこんなたびたび出掛けたりはしない。プラドにはゴヤ以外にもグレコやヴェラスケスなどの名作が数多くあつまっていることは、よく知られているとおりだ。しかし私は正直に言って、偉い坊さんの肖像を彫大にいたグレコには、どれも皆同じように見えて、興味を覚えるよりさきに何か退屈なもので圧倒されてしまう感じであった。ヴェラスケスの武者絵(?)についても或る程度それと同じようなことが言えた。それは絵の好し悪しの問題ではなく、要するに普通われわれが博物館へ行ったときに覚えるあのゴコチないような疎遠な感じがしたというだけだ。だから、もしゴヤがなければプラドも他の美術館と同じく、私にとってはいたずらに気疲れのするよそよそしい場所に過ぎなかっただろう。

もっとも私は、プラドで初めてゴヤの絵をみたわけではない。モスクワのプーシキン美術館にもゴヤはあったし、アメリカでも見たことは見た。ただしそれが本物のゴヤかどうかはわからないが——。あれはテネシー州ナッシュビルに滞在中、私はトマス・メブリーというあまり有名でない作家の自宅へ招かれた。メブリー氏は創作の傍ら広大な農場で葉タバコの栽培をやっており、むしろその方が本業のようでもあったが、若い頃に文学でグッゲンハ

イム奨学資金をうけ、ヨーロッパに留学して、ヘミングウェイの『陽はまた昇る』みたいな生活をしていたようであった。それはともかく私は、メブリー氏の家で自家製のカントリー・ハムとバーボン・ウイスキーをご馳走になったが、そのとき小机の上の絵ハガキ大の額を指さしてメブリー氏は、「これはわが家の宝であり、われわれは大変誇りに思っている」といった。つまり、それはメブリー氏がパリ留学中に買ったゴヤのデッサンであったのだが、私は咄嗟に何と行ってこたえていいかわからなかった。

たしかにゴヤを一枚——たとえばどんな小さなデッサンであろうと——、自分の手許に持っていれば、自慢したくなるのは当然かも知れない。しかし、そのときの私は広大なメブリー氏の農場をさんざん引っぱりまわされてくたびれ切っていたせい、ゴヤの絵はただ一枚の褪めたインキのペン書きの絵に過ぎなかった。図柄もじつはハッキリとは憶えていないのだが、馬に乗った闘牛士か何かの槍をかまえているような図だったと思う。どっちにしろ、そんなものは私には、このテネシーとケンタッキーの州境いのタバコ畑の真ん中では妙にそらぞらしく感じられるだけだった。

モスクワのプーシキン美術館でみたゴヤの印象は、もっと稀薄だった。そこには、青の時代のピカソや、ゴッホの麦畑の絵があったし、薄暗い壁にかかっていたマチスがひどくつまらなかったことは憶えているが、ゴヤはどんなだったかも知れてしまった。じつは私は日本をたつとき堀田善衛氏から、プーシキン美術館のゴヤのカラー写真をとってきてくれ、とた

のまれていたのだが、この暗さでは三脚がなければとてもカラー・フィルムなど写りっこない、と堀田さんには申し訳ないが写真をとるのをあきらめて帰ってきたことだけを、あきらかに憶えている。

それにしても堀田さんが、なぜモスクワくんだりでゴヤの絵の写真をとってこいなどというのか――？ 当時の私には、タバコ畑の真中でゴヤの絵を自慢するメブリー氏以上に、合点の行かぬことだった。いまになれば堀田さんの気持もメブリー氏の心境も、或る程度理解できる。モスクワの美術館にゴヤの絵が一点あるということ、これは少くとも堀田さんにとっては、非常に暗示的な意味のあることに相違ない。

私がブラド美術館でゴヤをみたのは、そのソ連旅行のかえり途である。「着衣のマハ」、「裸のマハ」をみて私は、いつてみれば公爵夫人のストリップをみる想いがした。意外だったのは、体に較べて顔が大きく描かれているためだろうか、長椅子に横たわったマハが成熟した体つきにも拘らず幼女めいて見えることだった。それに「着衣」に較べて「裸のマハ」は、赤味の射した表情が何かはじらいを含んでいるようだった。こんな想像は、いかにも通俗小説めいているが、この絵のモデルが誰であろうと、これを描いた画家の眼には貴族の衣裳を剥ぎ取ってみせようといった殊更な意図のあったことは、おそらく万人がひとりで感じることはないか？ 勿論、この意図的な眼が、何を告発し弾劾しようとしていたかは、デッ

サンを集めた部屋や、「黒い絵」その他をみてみれば、これはもう覆いようもなくハッキリわかる。しかし、われわれにとって異様におもわれるのは、これだけ露骨に風刺的な絵をかけた男がどうして当時のスペイン王朝のなかで宮廷画家でいられたのか、ということだろう。ゴヤは王様や貴族の肖像をたくさんかいており、それらは「黒い絵」をかいた画家と同一の人物であるとは信じ兼ねるほどであるが、綿密にみればそれらの肖像画もやはり内面に「黒い絵」その他に通じ合うものがあることはわかる。

ゴヤが宮廷画家としてこんな絵をかくことが許されたのは、つまり十八世紀末から十九世紀にかけて、スペインやヨーロッパは王政の「雪解け期」にあたっていたということなのだろう。

私がそんなことを考えたのは、たまたま当時のソ連で雪解けの進行中であり、旅行中もソルジェニツインの『イワン・デニーソヴィチの一日』が何度も話題にのぼったからだ。しかし、スターリン時代の収容所生活をかいた作品がフルシチョフの寛大な政策で陽の目を見たといっても、ソルジェニツインの文章には、ゴヤの風刺画にみられる毒々しさはないし、「黒い絵」の病的な不気味さともまったく無縁である。ソルジェニツインが決してソ連の現状について満足も樂觀もしていないのは明らかだとしても、その人間を見る眼は基本的にあかく未来に向かって楽天的である。それに較べてゴヤの絵は骨のズイまで「敵意」がしみとおっているように思われる——。これは必ずしも、ソ連の体制と当時のスペイン王朝との違い

のせいだとは言えまい。むしろ、この両者は体質的にかなり似かよったところがあるように思われる。

いや、スペイン王朝の体質はフランコ政権のスペインにも生きており、そこからソ連と現在のスペインとは似たようなところがある。たとえば武装している軍人の写真撮影を禁じている点など、スペインは社会主義国の東欧諸国よりもソ連に近いのである。

ところで、上野のゴヤ展で「裸のマハ」の傍に立っていたスペイン兵は、マハを衆人の眼から監視するためでは勿論ない。それは前にも述べたとおり「マハ」を国の宝としてまもるために、はるばるイベリヤ半島の何処かの部隊から派遣されたものであろう。その点、わがくにの文部省が黒田清輝の裸体画の下半身にシーツを掛けたりしたのとは、スペイン政府のやり方は大いに違っている。

いまでは、わが文部省も裸体画をかくしたりはせず、ゴヤ展の図録に今日出海文化庁長官は次のような文章を寄せている。

あの「着衣のマハ」と「裸のマハ」が今度海を越えて、遙々日本を訪れるのだ。門外不出のスペインの国宝が初めて日本へ来るのだ。

この喜びをどう現わしてよいか、私は知らない。ゴヤの前ではすべての言葉は不要である。感嘆の声すら空しい響きにすぎまい。

ただ私は奇蹟を待つ人のようにゴヤの到着を待っている……

まことに黒田清輝の時代を想えば、現代の日本の文明開化は奇蹟的な大変化といわなければならない。しかし、わがくには本当に明治時代と較べて何処が変わったのだろうか？ フランコ政權のスペインが十八世紀王朝の體質を残しているという以上に、わがくにの文部省は黒田清輝の頃と本質的には少しも変わっていないように思われる。いや、それは文部省がというより、われわれ自身の體質なり精神構造なりが変わっていないというべきだろう。

たしかに裸体画をシートで覆ったりするのは、当時の文部省が近代絵画に無知だったからに違いない。しかし、いまのわれわれが西洋近代画の本質を何処まで理解しているかは、本当のところかなり疑問なのではないか。裸体画は依然として、われわれにとってワイセツなものであり、国宝として衛兵までつけて陳列するにいたっていない。それは、われわれの西洋画の技法が未熟なせいでワイセツを脱して芸術になり得ないのではなく、われわれの意識のなかで裸体画は何処まで行っても歌麿やアブナ絵の女から出られないからであろう。

繰り返していえば、私はプラド美術館の「着衣」と「裸のマハ」に、公爵夫人のストリップをみる想いがした。とはいっても、それはあくまでも絵画としての陶酔感だったに違いない。だから私もまた今文化庁長官と同様に、「ただ私は奇蹟を待つ人のようにゴヤの到着を待っている、二十年前プラド美術館を訪れた時の如く胸を弾ませて」という心持で上野の国立西洋美術館まで出掛けたのだ。入口の前には延々長蛇の列が出来ており、しばらくそこで待たされた。この調子では、有名な「マハ」の前にはウンカの如き人波が押しよせて、ろく

に見られないかも知れないぞ、と思った。しかるに、この私の予想は半ば当り、半ば外れていた。たしかに私はその日、「マハ」を落ち着いては見られなかったのだが、それは決してこの絵の前にとくに大群衆が詰め掛けていたからではない。無論、「マハ」のまわりにも大勢の人の姿がないわけではなかった。ただ、どういふものか「マハ」の前に差しかかると人波のうごきは早くなり、潮の引くように次のさほどでもない絵の方へ移って行ってしまうのである。私は最初、人垣のうしろから黒い頭ごしに、この絵を見ていた。それがいつの間にか最前列に押し出され、「裸のマハ」に向い合っている。そうなると私は無意識のうちにも、何となく力んだ顔つきになっていたのだ。……私は、いまだ裸体画の前でハニかんたりするわけではないし、もしそんなことがあったら大変異常なことだと思っていた。しかし、その異常なことがたしかに私の中で起っており、明らかに平静を失ってそそくさとその場をはなれた。なぜだろう——？　こんなことはプラド美術館で「マハ」を見たときは勿論なかった。第一、誰からも自分が見られているという意識は——たとえ街なかやホテルのロビーなどで自分の皮膚の色の違いを意識することはあっても——美術館の中では一度もなかった。それが上野へくると私は周囲の眼を自分の中に意識しており、それは何か自分自身のワイセツなものを罪悪感として鋭敏によび起すのである。

プラドではゴヤのデッサンばかり数え切れぬほど集めた部屋があり、ここにはそれこそ見